

古民家で親子の大切な時間を  
夫婦の思いをカフェに託して



伊都郡高野町  
嘉積由彦さん  
YOSHIHIKO KAZUMI  
大阪から移住

囲炉裏を囲む嘉積さん夫妻。農家から譲ってもらった古民家を1年がかりで改修した。床の張り替えから煙突の配管まで、由彦さんが一人で行った。「囲炉裏で焼くアユは絶品」と由香里さん。

春は桜、夏にはホタル  
四季の移ろいを感じて



仕事に一区切りがつき、広々とした縁側で一息つく。古民家の持ち主だった農家からは、代々使い続けてきたという立派なたんすから、中に収めた漆器まで、そのまま譲り受けた。漆器は布で磨くとピカピカに。\*現役、の食器として活躍中だ。



旬の野菜やかまど炊きのご飯  
ゆったりした時を心ゆくまで

営業は土、日曜と祝日のみ。地元産の野菜をつかったランチなどがある。ランチは2日前までに電話かメールで予約。将来的にはシニア層がくつろげるカフェ「コレシカ」も開設予定。

ちいさなたね  
住所 / 伊都郡高野町東富貴197  
電話 / 0736-53-2078  
メール: chiisanatane@satobito.net  
https://www.facebook.com/tiisanatane/



自作のかまどでご飯を炊く。壁土を再利用し、粘土のようにこね上げて、色を塗って仕上げた。かまどのほかにピザ焼き用の窯も備えるなど、由彦さんの工夫とアイデアが詰まっている。

わかやまでの日々の暮らしとまちブラ日記



向かいの学校の校庭から\*我が家、が見えるんですよ。



「都会では暑さも寒さもぼやあつとされているけど、ここには四季がしっかりあって、それぞれに美しい」と2人。



季節の小さな花や木々の実もなんだか愛おしく感じる。



この辺がお気に入りの散歩コースです。

鳥の声と風の音を聞いているだけで心なごみます



杉林に囲まれた1反の水田で米を作っている。裏庭の畑ではタマネギやジャガイモ、ナスやトマトなどの野菜を栽培。収穫した野菜はカフェのランチにも使っている。



小さな滝のそばにたたずむ通称\*水神さん。水も空気もどこまでも澄んでいる。

家のすぐ近くの通称「どんぐり坂」と呼ばれる杉木立は、お気に入りの散歩コースだ。「静かで心が落ち着く場所」と由香里さん。



受け入れ施策 Come on!

和歌山県では移住者をバックアップするため、さまざまな支援制度を整備している。嘉積夫妻が利用したのは、移住後に新たに起業する人を対象にした移住者起業補助金(最大100万円)。厨房機器などの設備を整えるのに役立てた。このほか、空き家改修補助(最大80万円)などのほか、移住希望者を対象にした現地体験会も定期的に開いている。

詳しくは  
https://www.wakayamagurashi.jp/how-to/support/

日の当たる縁側に赤々と火のともる囲炉裏……。広々とした築150年の古民家に、子どもたちの弾けるような笑い声が響く。周囲を1000級の山々に囲まれた高野町の富貴地区。豊かな自然と澄んだ空気のもと、家族一緒にくつろげる空間を提供する親子カフェ「ちいさなたね」がたつた。

「育児や親子のふれあいつて、どうしても難しく考えがちですが、もっと気楽でいいんじゃないかな。そんな思いを形にしたのがこのお店です」と嘉積由彦さん、由香里さん夫妻は話す。部屋の片隅には、由香里さんの選んだ絵本やぬくもりある木の玩具が並ぶ。カフェは、博物館などの空間プランナーとして腕をふるってきた由彦さんと、保育士として32年間働いた由香里さんのノウハウと夢が詰まった空間だ。

「2人の娘も成人し、これからの

人生後半は、好きな田舎で」。そう思い立ったのは、由彦さんが50歳を過ぎたころ。高齢の両親が住む大阪府から1時間圏内を条件に、5年計画で準備を進めた。最初に訪れたかつらぎ町天野の住人の紹介で富貴を知り、何度も足を運ぶうちに、素朴な景観や飾らない地元の人が柄が気に入った。

「この冬は本当に寒いし、夜は暗い。そのかわり、星はきれいだし、夏はホタルも飛んでいる。そんな当たり前のことの大切さが身に染みる」と由彦さん。2016年にオープンしたカフェは、親世代はもちろん、子どもたちの反応も上々だ。「子どもも新鮮な野菜や水の味にも敏感で、古民家の楽しさにもすぐに気づいてくれる。そんな姿を見るのが何より楽しい」。由香里さんは目を細めた。



「ちいさなたね」とは、未来になう子どもたちのこと。カフェに来た子どもが、自然のすばらしさや大切なものを見つけてくれたら。そんな思いを込めた。



母屋と並ぶ納屋を再利用して、2階に住居に改装中。